

学習障害児の自己概念に関する比較研究

堀 美和子

1. 問題と目的

学習障害 (Learning Disabilities) という概念は、1962に Kirk, S.A. によって提案されて以来普及し、わが国には、1970年代になって紹介された比較的新しい概念である。現在、医学・教育・心理学などの各分野で研究が進められているが、未だその概念や診断について論議が続けられているのが現状である。本研究では、学習障害を狭義の医学的定義 (DSM-ⅢRによる) によってとらえ、他の障害との重複診断を認めるという立場をとる。

Chapman (1988) は欧米における学習障害児の自己概念に関するレビューから、彼らは健常児に比べて否定的な自己信念を持ち、それが仲間との関係を形成する際の否定的な社会的比較に関係することを示している。これらのいくつかの原因の内では彼らに特有な問題は、学習障害児の持つ認知上の問題がその自己概念に影響しているということである。そのため、本研究では特に学習障害児の社会的問題、中でも社会的認知の問題に焦点を当てて検討する。社会的認知は「態度、感情、意図を示す他人の行動に気づくことを意味するもの」で、それは「全般的な社会についての知覚、他者の行動並びに他者を含めた出来事や状況との関連において自分自身の立場の知覚」を含むと定義される。(English 1958, Johnson & Myklebust 1967)

学習障害児に対する社会的認知の研究は共通概念の不足などにより、日本ではほとんど行われていない。一方欧米では、社会的認知の研究の多くが健常児との比較によって行われている。また、その多くが、表情や感情のラベリングなどによって共感性を測定するものか、役割取得や非言語的コミュニケーションでの理解のスキルを測定するものである。(La Gteca & Mesibov 1981) 前者の研究では健常児との明確な違いは示されていない。一方、後者の研究では、一貫して学習障害児の社会的認知能力は健常児よりも低い値を示し、社会的状況理解や社会的関係の理解などが困難であることなどが示されている。つまり、感情そのもののラベリングよりも高次の情報処理過程で示される問題を持つと考えられる。また、学習障害児の社会的特徴は、いくつかの異なる要因の結果であり、社会的認知能力の研究結果は、その他の異なる

要因との関係も考慮して取り扱われるべきであろうことが示されている。

以上のことを踏まえ、本研究では、学習障害児の社会的認知能力を役割取得の実験的方法で測定し、自己認知、知的能力などとの関連を検討し、学習障害児全体の特徴を捉えること、そして個別的観点から、臨床記述を通して、学習障害児の社会的相互作用とその問題点を検討することを第1の目的とする。また、それらと、事例による検討で、学習障害児の社会的問題を様々な内的外的要因を通して、その全体的発達をとらえることを第2の目的とする。また、第3に、自閉性障害児との比較検討により、両障害の関連を検討し、学習障害の位置づけを明確にすることを目的とする。

2. 方法

被験者は DSM-ⅢR の学習能力障害に該当する6から14歳の学習障害児22名である。内10名が ADHD の重複診断を受けている。平均IQは85.0であった。また、軽度・高機能の自閉症児9名を対照とした。社会的認知能力は、本研究では二つの実験で測定された。実験1は社会的役割取得能力を測定するものであり、selman (1976, 1976)、山岸 (1981) の健常児の役割取得研究で使われている課題を一部翻訳して使用した。実験2は一般的役割取得能力を、より具体的に遊び場面に近い課題で測定するコミュニケーション課題であり、山岸 (1981) を参照して作成した。自己認知の測定は、桜井 (1983) の「認知されたコンピテンス測定尺度」を使用した。また、臨床像は、カルテの転記や集団場面・学習場面での観察、母親への自由記述による質問紙で把握した。

3. 結果と考察

(1) 実験結果を中心とした検討

社会的認知能力は両実験共に学年が上がるにつれ発達していることが分かった。社会的役割取得能力は、学習障害児では、健常児と比べて遅れ、小4から小6の間に自他の視点の分化が進んでいるが、発達の様相からみると、社会的役割取得の方が一般的役割取得能力よりさきに視点の分化が発達し、健常児と同様の発達経過をたどっている。また、社会的認知能力は、言語性検査IQと有意ではないがある程度の傾向がみられたが、測定された

IQとは直接的な関係を持っていなかった。

自己認知と社会的認知能力は因果関係にあるのではなく、他のなんらかの要因が介在していることが示唆された。学習障害児にとって、全体的な自己価値観は学習や運動といった活動を通して形成されるが、友人関係を中心とした社会的な自己認知はそれらとは別の次元で形成されている。そのため、学業に関連する自己評価は年齢が上がるにつれて低くなり、これに伴い一般的な自己価値観も低下しているが、社会的な自己認知には影響していない。

さらに、軽度・高機能自閉群とのあいだで、どの領域においても有意な差はみられなかった。しかし、自閉群での実験では、半数近くが実験不可能であり、これは、こだわりや社会的相互作用の欠落の重篤さと関連していると考えられ、また学習障害と自閉性障害は社会性（いわゆる自閉性）の強弱を横軸とした一直線上にあることが考えられる。そのため、両者の鑑別の困難、境界上にある児童への研究的アプローチに当たって考慮が必要となるだろう。

(2) 臨床像を中心とした検討

社会的認知能力の実験プロトコルから、第1に言語化する際に特徴がみられた。低学年で自己中心的段階のものでは、言語化の困難さが特有の形で表現され、高学年になり視点の分化が可能となった段階では、言語化の困難さを、ふざけたり、ステレオタイプ的な表現を借用したりして補っている。また、第2に絵そのものへの反応や、細部への拘りや理解困難がみられた。これらの特徴的な反応は、移行期以降の者には説明によって自らが手がかりとしたものが適当でなかったことを理解し、変更を試みることが出来たが、自他の視点が未分化な段階では、その訂正は困難であった。

自閉群では学習障害児群でみられた特徴に加えストーリーに無関係に自己の体験をそのまま理由にする反応や別のストーリー展開をしたり前の質問を引きずるなど、より低次の社会的認知の問題が提示された。

さらに、臨床像からは、低学年では、落ち着きがないなどの行動面が問題となり、その他の行動や発言のずれに示される社会的認知の問題は背景になってしまってい

る。3年以降では、社会的認知の問題が、対人関係や集団活動の中で示され、最も問題になっている。また、6年以上では、それまでの経験の積み重ねから、情緒的問題が前面に現れたり、一方、自分なりの社会的態度を身につけることで適応していたりする。ということが示唆された。

(3) 全体的考察

軽度・高機能自閉児と学習障害児では、社会的認知能力については同種の障害を示し、また、両障害は社会性の強弱を境とした連続した障害であることが示唆された。そこで、発達障害の各々の位置づけを、総合的な知的能力、認知機能の偏り、社会性の障害の程度の3次元の軸を使って捉えることによって理解できる。

社会的認知能力の発達の遅れは基本的障害のため生じるが、健常児の発達と同様な発達経過をたどっていることから、社会的経験の積み重ねや異なる視点や手がかりの提示によって、社会的認知が促進されるだけの能力を持っていると考えられる。このことは、学習障害児の教育や療育の必要性和有効性を示すものである。しかし、他の機能で補うことによるずれも生じており、その後の発達をどう捕らえていくかが今後の課題となるだろう。

4. 事例的検討

事例は中学2年の、比較的典型的な状態像を示すと考えられる男子で、計算障害・書字障害を有している。乳幼児期から多動傾向があり、言語発達に遅れがあった。就学後は、集団での独自の行動、学習上の問題、学校側とのトラブルなど問題が表面化してきている。パーソナリティテストからは、強い防衛的態度や自己像の萎縮、内省傾向の乏しさが感じられ、共感的な人間関係を結ぶことの難しさなどが示されている。

この事例においても、社会的認知の障害が、集団での適応の困難さと対人関係での問題となること、そこから生じる自己認知や自己評価も内省的なものではなく明確な外的な評価から形成されること、自我防衛的な社会的態度を形成することで適応していることなどが確認され、また、そのほかに学習障害児特有の情緒的活動やパーソナリティ特性が示された。